

わたしのこのごろ <会員>



高橋北修

昨年3月、久しぶりで、創元展の審査に上京するつもりであった。軀の不自由なところ、制作と焦りで、遂に心臓を悪くして、1ヶ月入院した。入院の経験は初めてで、こんな退屈なことはないと思った。そこで家では忙がしくて読めなかった、マルローの東西美術論を、とりよせてひろい読みした。前篇は、絵画の複製についての理論だ。私は軀を悪くして以来歩行が、不自由なため、いい作品に接することがない。仕方がないから複製でも我慢をしている。最近各国の印刷技術が進んだが、それでも原画に比べると、はるかに違い。マルローの複製論を読んだことによって、満足出来る心境になった。いい音楽を、レコードで我慢する気持で……。

<出品作について>

菊地精二

この1月から伊豆の東海岸の中程の浮山温泉郷に同郷の友人がアトリエをたてたので、5、6回訪ねている。今までは西海岸をくまなく歩いたので、伊豆急などの走る東海岸はつまらないと思っていた概念がここに腰を落付けて描いてみると、モチーフが案外多くて間違っていたのに気がついた。

「川奈」「富戸」「稲取」「須崎」などの漁村や港が、いくらか小ぢんまりはしているが描けるところが多い。

僕は人体画に多くのエネルギーをかけているが、10号2、3枚をもって写生に出かけるのが楽しみになっている。大半は描き上げるが完成は画室ですることになっている。

今回出品した「富戸」も程近いところで、黄色の岩肌にした小さな漁港のたたずまいが面白く2枚ほど描いてみたものの1点である。



秋山進



長年制作をつづけているあいだには、その様式や手法がいつしか習性となるままに、そこに介在する習癖や欠点が皮膚にもこびりついて、それらを矯めるには極度の努力が要るものである。まして手法が固着して一つの殻となったとき、これをぶち破りうることは、誠に至難なことである。

わたしは、今病気療養中です。どこの病院にも いていません。心の病気だからです。

絵が、すごく好きになったり、どうでも よくなったり、描くという意味が わからなくて、何もかも いやになったり、

原義行



まあ 心が ぼらぼらの状態なんです。早く なおったらいいなあと思うこともあります。



小野垣 哲之助

10数年前、独力で家を使った。その時2階からすすりで張り終えたベニヤの天上を突き破って階下に転落し腰をしたたか打った。それが原因と言う人もいるが6年位前から首や肩に異状な凝りや痛みを感じるようになり、以来整形外科、はり、きゅう、もみ療治と手をつくしたが効果なく、現在に至っている。

病状は好転しないままに苦痛には慣れて、日常の小さなことは支障はないが、さすがに大作になると痛みがきつくなるので無理、自然小品ばかりの作今だが、展覧会が近くなると心中おだやかでない。そのイライラが困となってか昨年全道展の頃に胃潰瘍になり、この3月までかかった。

以後はのんびりかまえることにして治療の奇跡を待っている。

〈美神をおっかける醜い男の話〉 伏木田 光 夫

ねえ、もう僕にいいかげん掴まっていいじゃないか、僕は中学2年の時から貴女様に夢中になってしまった。ランボーやラディゲーのように僕も天才だと思って、貴女を好きになったのが間違いのもとだとしても、僕が自殺しそこなったり、コッペパン1個で幾日も絵筆にしがみついていたのが、貴女の、ほんのちよとした微笑がほしいためだったぐらいはお知りでしょうに。



貴女は浮気女だ、娼婦、助平女、おすましや、糞、悪女、ホッテントット、大衆食堂、アイロン、ブタビンク、糞女郎、黄金の肌にはライフルでポチポチ穴を開けてやらあ。

お前はハイウエーにいるのか、花々の咲く泉にいるのか、僕は血迷っているんだ、オレは。

〈近況雑感〉

木村 良

絵をかくことは宿命みたいなものだが大先輩がよく言っていた。

何処にいても、どんなに忙しくても絵をかく時間を見付けるものだ。絵かきとはそんなものか？

(新緑の日)

勤めとの関係で駒ヶ岳山麓に住まいして1年、山もきれいだが大火山特有の灌木地帯の四季の遷り変りが楽しい。黄からグリーン、オレンジ、オーカー、ブラウンになって銀世界に。澄んだ空気は四圍の色彩を透明にする。絵具(顔料)は自然の中から人工を通して作られる。してみれば眼に映る自然を自分の眼で

発見した色彩を生み出すのが絵かきだろうか？

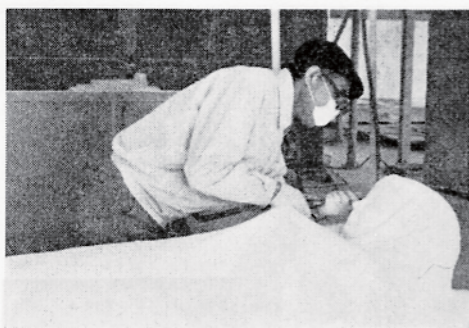
自然も人工も拒否して製作しているH君のことを思い浮べながら……無限に存在する色彩を自分なりに画面にぶっつけている。

カッコーの声と澄んだ大気、移り行く自然を眺めてスモッグという言葉すら忘れてる。

太宰が一時マルキシズム運動に走ったり、松本竣介がかなり衝動的な画論を提唱したことが、彼等にとってみれば、その作品から推して大変な問題だったと思う。現今の社会や政治の情勢に対して、作家は、無関心に黙否していいのか、積極的に参加するか、作品とそう問題を切って考えるか、戦後盛んだった『政治と文学』論争を振り返りながら、私がこれからとらなければいけない姿勢はどういうことか、作品とどう結びつけるか、当面の課題です。



福井 正治



山内 壮夫

モデルのデッサンをしていると、思いがけない美しい線を発見したり、すばしい面やリズムをもった運動の流れに、人間の体の微妙な不思議さの驚きと感激を味うことは、画かきや彫刻家の仕事の喜びの一つである。

出品作は、そんな時手早く粘土でスケッチしておいた作品で、気張らず特別の意図もない淡々とした旧作である。たるんでいるぞと叱られるかも知れないが、私にもこんな一面があることで今年の責任を許していただきたい



〈氷上の人〉

国松 登

自然が人間めく時、氷は暖かかった。
ある日……愛は凍り、氷は岸に息吹いていた。

月の美しい夜がやって来ると、今にも崩れ
そう一塊の淡い風景が、北風に乗って静かに
沖を指して流れて行く。

氷はどこから来て、どこへ帰えるのか私は
知らない。

〈その帰りの車中で……〉

大 本 靖

それらの多くの作品は「ズバリ言っている」。
今春都美術館の公募展を見て 計らずも気付
いた一つに 道内作品の共通的に「言葉がハ
ッキリしていない」ことだ

それは言葉の長短や形容詞の数ではないし
地理的条件による宿命とは思いたくないのだ



〈大作の夢〉

西 村 喜久子

年功を経て来ると絵かきほどの展覧会でも出品作は
大体小品になって来る。如何にも落付き払ってよう
な印象を与えるが人間はいつも平静でいられるだろ
うか。時には破目を外したりのを見てほしい時もある
と思う。私は昔画いた二百号三百号大と取組みたいな
今でも思う。只現在出している会が大きさ制限する
のでせめて全道展の時に思い切り大きいものを何年か
かって仕上げたいと思っているが、中々実現出来ない
ている。モチーフも大きいものが沢山ある上に体力も
まだまだ大丈夫と思っているが、案外足腰が痛い等と弱
音を吐くのかも知れないけど一とに角郷土の夢は何と
美しく広大である事か。



山 本 一 也

目下 思索中です。

渡 会 純 价



神田 一明



Mami 25 -68
ヒゲノリ

<このごろ>

米坂 ヒデノリ

道内の各地では、ひきつづき開基百年の記念行事が計画されている。

侵すものと侵されるものとの立場があるならば、これらの催しは将に前者に立つものではないか。

亦しても民族の優越感にひたっているようなおごりはしないのか。

絵画の中の

芝居がかったモチーフ、無内容な難解さ、どぎつい効果、思わせ振りの手法、自分とのつながりのないテーマ、見せかけだけの現代性、無意味な細部と饒舌、衰弱したどうどうめぐり。

以上のことを僕は嫌う。
そのようなことに自分が陥らないように心掛けている。



<実の一つだになきぞ悲しき>

松島 正幸

生れながらに才能に恵まれ、財あり、おまけに努力家なんて奴がいたら、誰だって、かないっこない。皮肉なことに、芸術にあっては、努力というものは底が知れている。

芸術家とは元来、孤独で、傲慢不遜な、エゴイステックなものだ。

絵画に於ては、新しい古いなど問題にすべきでなく、常に深さだけが問題なのだ。

形式が、どのように変化しても、その本質的な価値には何んの変わりもない。

人間を探求すれば、する程、醜くさ、汚なさに気づく。だから人間は演技をする。演技こそ本質なのである。

私は貧しく生れ育ったが故に、終生コンプレックスから脱脚することが出来なかった。

しかし、この頃は一人の人間が、その運命づけられた環境の中で、最大の努力をすることに、価値を求めようと思っている。

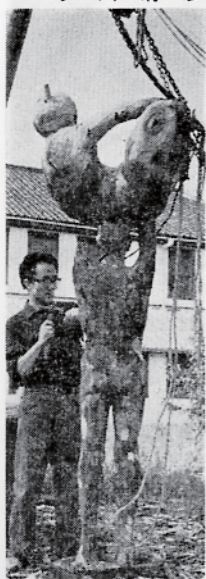
どうせ、何百年も残るような作品などは、出来ないに決まっている。その殆んど作品は地上から消えて行く運命にあるんだから、それで良いのだ。

私達凡人が、芸術というものに、もし、ふれることが出来るとすれば、それは死の淵に行つた瞬間ではあるまいか。

この頃、そんなことを考えている。

小川 清彦

春の国展も終り、少し暇になったので、このところ若い女子学生をモデルに、首の連作をやっているが、仲々うまく行かない。なるべく対象に食いついて、忠実に作ることを心がけてしているのだが、やはり、マンゾーやファッチーニの首などが目前を去来する。力が足りない故である。首はむずかしい。西欧彫刻がわが国に入って久しくなるが、マンゾーの首に較べられる首一つを、日本人はまだ誰も作っていない。これからは、皆千年位生きる積りで、息の永い日本人の彫刻を作り出す時期ではないか。それでなければ日本に真の彫刻の開化は望めない。目前の目まぐるしい美術界の現象やマスコミに眼を向けていたのではだめだ。また日本の伝統などといって素材、技法の中にとじ込めてもだめ。西洋人に真似の出来ない、精神性に基いた、物の内側をのぞく態度を養うことが肝要ではないか。



蛭子 善悦

6月0日 午後2時、石神井のWさん宅に仔猫とどける。

6月0日 午後5時30分、Oさんの個展レセプションに出席、久しぶりにU、W、Kその他の諸君に合う。閉会后、Oさんその他の友人と有楽町して中野で飲む。

6月0日 思ったこと……、旅、手、軟体、糸、雲、紅彩、空。

6月0日 Yさん夫妻、Oさん、Uさん、Kさん来訪、庭でかねて約束のバーベキューパーティー。

6月0日 雨ふる。





小島 真佐吉

アトリエの壁に碧山と号する書家が書いた色紙に「愛」と一字の額が飾られてある。

これは5年前銀座での個展のとき絵を見にこられたこの老人が私の牛の絵に愛情を感じると言って次の日に又やって来て色紙を届けてくれたので私の牛の絵の色紙と交換したもので仕事の休止に眺めている。愛のある作品を創るように自分に言いかせている。



渡辺 真利

画家という名の失業者……。絵を描くことは生きることと同様につまらなく、難解だ。しかしそのつまらなさをとことんまでやってゆくことに重要な意味がある。社会の虚構の中でそれを回避してはならない。もっともっと愚に徹しよう。



Mami Watanabe

熊谷 善正

イタリア政府よりの給費留学生として1月早々渡伊、ローマのアカデミア・ベルアートに籍をおき3ヶ月間の遊学を夢中で過したが文字どおり感動のしばなしであった。

美しいイタリアの自然、古くさびた町々、信心深く、又、享楽的生活を追うイタリアノー……街全体が美術館ともいうべきフィレンツェ、アッシジ、ペルウジア等々で、古代文化を忍ばせる遺品や遺跡に触れ、人間の歴史の呼吸するミュージエオの中で影の深い美女が微笑み獣神が眼を光らしていた。黙して語らない中世の壁の色……崩れ落ちた石柱に神話の世界を読み、やさしく、はげしく、地中海の人と自然は様々な顔で



僕に語りかけてくれ、アンフォールに汲んだワインにしたたか酔った人間性のユナイター（一致）を知った。

〈方角大音痴的身辺多忙〉

竹岡 羊子

1年365日の中、65日は北海道の外で過ごすことが多い。上京するといっても今は急げば1時間余りで着く時代なのに、出たついでとばかり盛り沢山のスケジュールを組む。少しでも多く見て、聞いて、感じてと欲張る。忙がしい忙がしいと云いながら一度で済む事を二度もやる。千才に着くつもりが気がついてみると板付（福岡）だったってなくあいで、また戻らなければならぬ。どうして北行と南行をのり違えたのか、起りようもないような間違いがどういふわけか私には起る。全く事実は小説より奇である。それ以来というものの私の作品に「のり違いの感じね」などと評する悪友が増えた。

〈幻想譜〉

谷口一芳



私の生活信条である華麗な夢をもつことが発想の根源で、ここ数年来より幻想譜シリーズをテーマとして制作をつづけている。

野の鳥をつかい、さらに架空の鳥をつくり擬人法で、できるだけ豊潤な色彩をもって陶酔、極致、幻覚、夢想など幸福と不安さの感動を表現するねらいですすめている。

これは無限のよい仕事と思ふし、定着性がむづかしいだけに感覚の枯渇してしまうことのないよう自然観察にも意を用いている。

垂直の視野
病人と
蟻地獄



一 原有 徳

<作家はどこへ行くか>



鷓 川 五 郎

絵画が人間をめざしてのあくなき追求であるとするれば、現代絵画のめざす人間は大衆でなければならぬ。大衆とは量を意味しない。圧制の権力や資本の重圧によって常に敗れひきちぎれている側の人間である。絵画を、権力や官僚機構や資本家が擁護し愛玩するという事は本質的な誤解である。作家がパトロンを求め、権力側に尻尾を振って、作品を商品のように売り込もうとする事は、人間的誤謬の上に立つと思われないか。さりとてソビエト体制のように、作家が国のアトリエで俸給を支給されながら国のテーゼに従って制作するという事も救われがたい姿勢ではある。作家はどこへいけばいいのか。人間存在の不条理が最もまなましく血を吹いているのが、外ならぬ作家という存在ではなからうか。

岸 本 裕 躬



現代の無機的人間関係を余儀なくさせている社会機構の中で、ローカルの民芸が大衆に希求されているという。人間自身が己れに挑戦した科学性に触ばまれた終結の現れといえようし、元来人間は火と土と水の始原性に回帰してゆく一つの実存的要素を示したものだと思う。北海道という風土実態を掴もうとした作家は多く輩出され、現在も我々の生存しているこの環境にローカルで独自の芸術を求め、しかもその発生母体が全人的であり、世界的疎通につながる仕事が行なわれている。

我々は、自己を見つめる「目」が、即道産子住民の生活実態に敏感であること、これがもっと研ぎ澄まされる必要性を痛感する。既に中央や世界の動向に成されてしまった芸術類型にはもう辟易した。己れの踏みしめている土と共存者の中に視点を置いて芸術発生の母体を再度呼び起さねばと自分に言いきかせている。『我々は何処から来て何をなし、何処に行くか。』このゴーガンの人間凝視の言葉は、現代人の危機に対する人間生存の底部をゆり動かす警句に思えてならない。

<桐に寄せて>

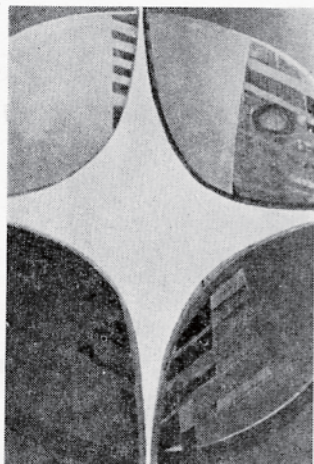
東 政 雄

桐を描いてからもう何年になるだろう。桐ばかり描いているように想われるけれど、どうも出品作が桐になってしまう。アトリエの新築記念に苗木を植えてから八年目、二、三年前から、ぼつぼつぼみがついた。今年は花が咲くかな、毎日枝を見上げるが咲かない。今年は咲くだろうと思ったが、やはり咲かない。ようやく今年はずぼみがかぶっくら顔を出した。淡紫の一番咲きの一年生の花が開いた。



枝

風よ花を散らすな、大事な花だ。
桐のように永い風雪から開放されて、画家の一年生だなあ、桐を見上げては、よく育ってくれたなあ、自分の歩いて来た道をふりかえり、この若桐のような、おそまきながら一年生の花のように年を忘れて、新しい花を咲かしたい。

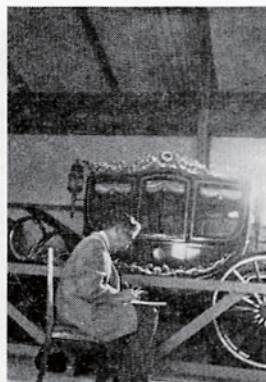


<兆す>

坂 口 清 一

露出狂的表现から脱皮出来ないで、鯁舌とも言われた。自分に対して偽善でないならば変容の必要はないはずだが、今、必然的に変容しつつあるように思われる。

変容は進歩とは限らない。自戒する、消極的であるが、表現のために苦しい毎日である。



一木 万寿三

面のためには皇居主馬班へ出向いて、天皇陛下のお馬車を写生させてもらうなど、現地写生や資料調べと、画く前の仕事がなかなか大変であった。この仕事のなかばに東京から来た日本画家の友人が、まあこれも勉強だよ、といって慰めてくれたが、なるほどそんな考え方もあるかなあと気をとり直し、この仕事に向う間は、できるだけよき職人になりきろうと、けなげにも努力を続けている次第である。

北海道100年というので、今年は何彼と催しが多いようである。さて私事になるが、かねて依頼を受けていたエドウィン・ダン顕彰画の制作も、今年はなんとかまとめねばならず、このほどようやくその第1期分をほぼ画き上げた。なにしろ90年も昔の事物を絵にしようというのだから全く大変な仕事である。郷土史の先生にお知恵を拝借したり、牛や馬や農機具の先生方にいろいろうかがって勉強したり、ダンの足跡を残した方々の土地や牧場の視察、

さては東京青山官園の一場

<北海の留恨歌>

砂田 友治

私のかきたいもの それはどうしようもない程荒れてしまって 誰も顧みなくなった海のことだ。今は遠くに消え去った此の海を 極めて現実的具象的に、且つ最も抽象的な様式でかきたいものだと思っている。

さて此の海、もう魚などなくなって白けている。よくもこう荒っぽくたったものだ。だから勇ましい漁夫のかけ声など、今は追憶にすぎない。ところが遥かに波の彼方から とぎれ勝ちに渡ってくるオノコの声が我が耳を捉える。ツワモノどものコーラスは 幻聴かノスタルジーか。男たちのほかない夢の一幕は 夜明け前の北海道である。

登山靴の底から洗濯板までみんな素材だ。なんでも利用してやろう。山や島ばかり創ってきたが仙人でもあるまいし、もっとなまなましい、ぐれつでふてぶてしい作品をつくりたくなった。偶然も手伝って自分よりいい作品よ出来れ。(まずは一ぶく)

浅野 愧



諏訪田 勝 衛

最近北大構内の樹と植物園をかき続けているが四季それぞれに絵心をかきたててくれる。

絵を描くことは楽しくもあるが、またそれなりに苦しくもある。他に趣味を持たない僕に絵を描くということがなかったらどんな毎日を過すであろうかと想像したとき絵を描くことをうれしく思っている。

江別に生れ殆ど江別のみを過しているが画題を江別に求めたことがないが、今後は江別を描きあるきたいと思っている。

社会情勢や経済は予想をこえて大きく変動して行く。しかし神経をこの点にのみ奪われたい。そのためにもどんどん絵を描くことだと思っている。

生活

目の色を変えて、子供に追いまわされる。

「物」に追いまわされる。

子供や夫は、自分ではないのだし、「物」はまた人間でも生活でもない。

何々方式、便利主義、合理主義——うんざり。

あってもなくてもよろしい生活。

芸術

こんなものが制作だとは——気は確かか。自負を以って制作しているのか。

神田 比呂子

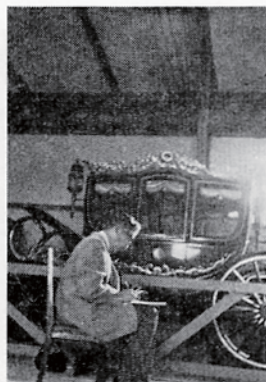


そんなもので満足しているとは、おめでたい。はんばなものを作るのなら おやめなさい。

芸術とは 最高のものをめざすのでないのなら 唾棄すべきだ。あやまった態度で制作して行くのなら、全く制作をしないよりも、感受性が磨耗してしまうのではないか。

最後に——

憎むべき敵におくりたい言葉が また自分自身へおくる言葉としても 丁度よいことに気付く。



一木万寿三

面のためには皇居主馬班へ出向いて、天皇陛下のお馬車を写生させてもらうなど、現地写生や資料調べと、画く前の仕事がなかなか大変であった。この仕事のなかばに東京から来た日本画家の友人が、まあこれも勉強だよ、といって慰めてくれたが、なるほどそんな考え方もあるかなあと気をとり直し、この仕事に向う間は、できるだけよき職人になりきろうと、けなげにも努力を続けている次第である。

北海道100年というので、今年は何彼と催しが多いようである。さて私事になるが、かねて依頼をうけていたエドウィン・ダン顕彰画の制作も、今年はなんとかまとめねばならず、このほどようやくその第1期分をほぼ画き上げた。なにしろ90年も昔の事物を絵にしようというのだから全く大変な仕事である。郷土史の先生にお知恵を拝借したり、牛や馬や農機具の先生方にいろいろうかがって勉強したり、ダンの足跡を残した方々の土地や牧場の視察、

さては東京青山官園の一場

＜北海の留恨歌＞

砂田友治

私のかきたいもの それはどうしようもない程荒れてしまって 誰も顧みなくなった海のことだ。今は遠くに消え去った此の海を 極めて現実的具象的に、且つ最も抽象的な様式でかきたいものだと思っている。

さて此の海、もう魚などなくなって白けている。よくもこう荒っぽくたったものだ。だから勇ましい漁夫のかけ声など、今は追憶にすぎない。ところが遥かに波の彼方から とぎれ勝ちに渡ってくるオノコの声が我が耳を捉える。ツワモノどものコーラスは 幻聴かノスタルジーか。男たちのほかない夢の一幕は 夜明け前の北海道である。

登山靴の底から洗濯板までみんな素材だ。なんでも利用してやろう。山や島ばかり創ってきたが仙人でもあるまいし、もっとなまなましい、ぐれつでふてぶてしい作品をつくりたくなった。偶然も手伝って自分よりいい作品よ出来れ。(まずは一ぶく)

浅野 愷



諏訪田 勝 衛

最近北大構内の樹と植物園をかき続けているが四季それぞれに絵心をかきたててくれる。

絵を描くことは楽しくもあるが、またそれなりに苦しくもある。他に趣味を持たない僕に絵を描くということがなかったらどんな毎日を過すであろうかと想像したとき絵を描くことをうれしく思っている。

江別に生れ殆ど江別のみを過しているが画題を江別に求めたことがないが、今後は江別を描きあるきたいと思っている。

社会情勢や経済は予想をこえて大きく変動して行く。しかし神経をこの点にのみ奪われたい。そのためにもどんどん絵を描くことだと思っている。

生活

目の色を変えて、子供に追いまわされる。

「物」に追いまわされる。

子供や夫は、自分ではないのだし、「物」はまた人間でも生活でもない。

何々方式、便利主義、合理主義——うんざり。

あってもなくてもよろしい生活。

芸術

こんなものが制作だとは——気は確かか。自負を以って制作しているのか。

神 田 比呂子



そんなもので満足しているとは、おめでたい。はんぱなものを作るのなら おやめなさい。

芸術とは 最高のものをめざすのでないのなら 唾棄すべきだ。あやまった態度で制作して行くのなら、全く制作をしないよりも、感受性が磨耗してしまうのではないか。

最後に——

憎むべき敵におくりたい言葉が また自分自身へおくる言葉としても 丁度よいことに気付く。

<キネチック・アート>

野本 醇

第8回現代美術展を地震をついて観に行った。絵画もさることながら、彫刻ともつかぬ造形物に驚いた。話には聞いていたものの、暗い室でストロボが光り、ステンレスの曲面を電光が走ったりするには、今までの美術に対するのとは別の感動的な体感であった。いずれ美術の部門になるだろうとは思いますが都美術館、彫刻と同居など、考える面も多いが美術家の巨大なエネルギーは爽快であった。ある程度の物理の知識や設計図も引けないと出来ない鏡のように輝く仕上げには職人の手をわずらわし材料も高価なものであろうが作って見たいものの一つであった。社会に参加する意味の深い魅力ある造形物でもあった。



野本 醇

大友 一夫

に札幌大丸で個展をすることになり、その方の仕事にも取掛っております。先日渋谷のデパートで「モジリアニ」展を見ました。偶然性もハタリもない作画態度の誠実さに打たれました。裸婦の肌の表現など、ねっとりとした絵の具の積み重ねから、あの独得の絵画スタイルを創造しております。「絵画は要するにつきつめてゆくと、自分独得の絵画スタイルをつくり出すことだ」と、話された高井真二氏の言葉を思い出します。「自分独得のもの」これは仲々大変なことだと思います。



長谷川 常雄

現代社会では常に人間と人間の間一種の不信に似たものが存在するようである。少し飛躍するようであるが、ベトナム戦争しかり、黒人問題しかり、しかしその一方では泰平ムード、マイホーム時代とかよく言われるファミリーな一面もある。そしてそれらの底辺には云い知れぬ危機感と疎外感が相交叉して不安定なフォルムを形成しているように思えます。何か不安で落ち着かない直接的表現として口に出ないものがクイッションとして内在しているのであろう。

いざ制作となると、全くナンセンスなそしてグロテスクなるフォルムと色彩を帯びてキャンパスに飛び出してくるようである。何かに耐えようとする他何かを喪失したような混迷が感じられたりもする。

<新しいモチーフ>

久守 昭義

昨年牛の頭蓋骨を手に入れました。前から絵に描いてみたい気持ちもあったのですが、後藤庸也氏の素晴らしい熊の頭を手に入れた話が動機になったようです。しかし私の手もとに届いたのは、皮を剥いだ血のしたたり落ちる生首でした。とろーんとした眼差しで私を睨んでいるのには、思わず寒気する薄気味悪いものですが、そこはやっぱり絵描き



です。好適な画材ともなればなんのそのとばかり、それからと言うものは肉を剥がすのに煮たり削ったり苦心惨憺……3ヶ月位かかったのでしょうか、見事な頭蓋骨が出来上りました。骨の油気も抜けず光沢があり、形も実によく堂々として、歯をむき出しているさまは造形的に面白く私のアトリエの唯一の飾りものになりました。



岸 葉子

7年ぶり、北海道で個展をすることになりました。札幌は本当に変わってしまい、唯々驚いておりましたが、1時間も歩いていますと昔からの店がそのままの姿で、また、同じ屋号でビルになっていたりして、やっと札幌にいるという気がしてきます。街と一しよに人も変わってしまったのでしょうか、街を歩いても、あちらこちらで友人にぶっかることもなく、やはり札幌の移り変りを感じます。

わたしの ころごろ <会友>



志津 照男

冷酷で錯そう、混乱の
現実

たまには幼年のころの
おもい出すことも必要
ではないでしょうか

ガキ大将—小心でな
きべそ、らんぼう

そして自由

そんなころの自分を…

……



池田 正之助

有珠岳を眺めて2年、今年の2月に厚別町
に引越しをした。有珠2年間の生活のしめく
くりの有珠岳を背景に土地の想い出を描いて
はみたが男性的な有珠岳にはふれることがで
きなかつたのが残念。

赤いどつしりとした有珠の姿を描こうとし
た転勤当時の意気込みはついに実現できず夢
をいだいての転勤はサラリーマンを背負った
私の次の土地での作品への課題としていつも
つきまとっている。

諏訪 英雄

自分の考えていることを語ってくれる形、自分の考
えを語ってくれる色、そしてマチエル、勿論、構成も
あろうが。とても簡単な結論だが、仲々そこに近づけ
ない。

具象的な形の中にイメージを形象化したいと思っ
ている。そう思うなら具象的な形にとらわれることな
く、自由にイメージを形象化すべきだとも思うが、そ
うも割り切れない。勿論かつての仕事の中でそのよう
な事も試みて満足出来ないまま放棄してまった経緯も
ある。

とにかく歩みはのろいが、語りかけてくる絵を描き
続けたい。

<岩内は港町で
ある>

大地 康雄

港はスケッ
チの最適など
ころで素材が
ゴロゴロして
いる。近頃は
専ら潮風、浜
ッ風が吹きぬ

ける港をモチーフに手あたり次第に描きながっている。

近代化した埠頭はテトラポットが群をなし、燈台は
大きく伸びるからに派手に活動している港の中に、
野ざらしになっている漁網、ドラムカン、破船等が目
につく。何か人生のパノラマの感がする。

使い古されたガンジガラメになった網を一つとらえ
ても、力強いエネルギーや生命感が肌に感ずる。

—それとばかりに制作に全力投入する。

ゴッホのタッチ、マチスの色彩いやサイケデリック
調などとキャンバスは転々と回転していく。

でもどんなに描いても「自分は自分である」

GOING MY WEY 主義で描いている毎日
です。

例によって画狂老人の「一百才にして正に神妙なら
んか、百有十才にしては一点一格にして生くるが如く
ならん云々」をモットーにこつこつやっております。
まさに本職の方も多忙を極め、当地の地方病的存在—
一気管支喘息に追いまわされ、好発時期には寝るひま
もないくらいでした。テレビン油等に敏感な方は御用
心—平常の制作時間が極く限られてしまいますが、
これを他人の倍長生きする事によって補おうという根
性。

幸いにして当地、良き版木入手に不便を感じないので
版木に埋って暮らしております。どうぞスケッチに
お出かけの折等お立寄り下さい。



浅野 武彦

武



齋藤 一 明

……改めてみつめた人間の裸の美しさは、ぼくにとって一つの感動だった。偉大な自然の深さに敬虔なおののきすらも覚えたのに、それをなんでぶきように仕立て直さなければならぬのか。真に因果な事だ。

これは、ぼくにとって初めての立像でもあり、また、そのころ失なわれた愛への告別でもあったけれど、

限られた時間と、乏しい経験では、コトバはかたことにすぎなかった。

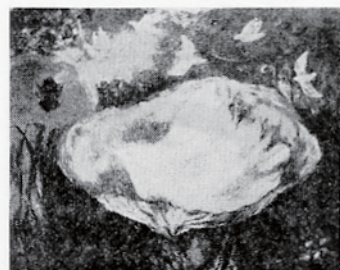
己れをいつわらずにありたいという願いは、いっも泥塗れの矛盾の中であがいているけれど、なにはとも、与えられた現在の時点を大事に生きたいと思うのです。

昨日もそうであり、今日もそうであったように……。



北 浦 晃

日常生活の大部分の時間を絵以外のことにつかっている。できるだけ不健全な小説を選んで読み、つまらないテレビドラマを熱心に見つけ、人間について考え、組織について発言し……。そんなウジムシ的なもろもろがイメージという名のはえに成長し、頭のまわりをわんわんいって飛びまわり、ベタベタ糊のついたリボンやテープをそっとだせば、たちまち2、3匹くっついてあばれまわり、やがておとなしくなり、ベッチャリつぶされて<版画>にされてしまう。安売りをしようと量産などすれば、まったく同じ顔が10枚、私の方をじっと見つめて言っているのです。「困ったことをしてくれたものだ。」



安 多 郁 子

ふたたび <ローランサンのかなしみ>を

下手な絵よりも、もっとかなしいのは 言葉のない絵です
言葉のない絵よりも、もっとかなしいのは うたのない絵です
うたのない絵よりも、もっとかなしいのは 退屈で、忘れられてしま
う絵です

ローランサンよ、あなたが此の世で燃やした終極の目的は愛だったのですか？

そして祈りだったのですね

だからこそ、あんなに見事に生きたのですね。私は毎日探しているのに見つかりません。この強烈な刺激だけが拍手をよぶときに……危険な理くつだけが突走るこのときに……一体どこへいってしまったのだろう。

おしえて下さい、永遠に愛を封じこめ祈りをぬりこめてしまう、キャンパスのあることを——。

鹿 毛 正 三

日中はリスの子、兎の子のような美しい瞳をした知恵おくれの子たちを教える苦小牧市山なみ学園の教師、今日も終日、この子らとナラのホダ木にしいたけ菌をカッチンカッチンと打ちこみ「来年はしいたけのバター焼きを腹一杯喰わせるぞ」といって共に働き、夜は夜間画家の看板を掲げて制作生活というところ。比較的知能の高い子が、ある日こういきました。「先生絵描きなんだってナ、売れないのか。下手なんだナ。」百のお世辞よりこの一言、正に胸にこたえました。

何年後こう彼にいわせようと思う。「先生やめたんだってな。絵うまくなって売れるようになったのか。」と。



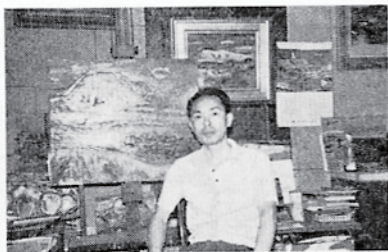
西 村 徳 一

さっぱり思う様にならない100号の絵を眺めているうちに6月が来てしまった。

タバコの数が減るくらいに絵具の方も減って行ってくれば、もう少しまとまりがつかのにと思う。

もっとも、この事では皆同じ様に苦勞しているのだろうと思っているし、まあ先も長い事だと思つて割合に気が楽になって、またタバコの方に手が行ってしまう。

今年は戯曲をテーマにして描こうと思つて、昔使った脚本を引っ張り出して読み直しているうちに、もう一度演劇の舞台に立ってみたいとなった。



松田 実

関西に移り住んで早くも5年を過ぎました随分御無沙汰して申訳なく思っています。どうかか生活にも慣れ相変らず元気で居りますから御安心下さい。

永年豪快な北海道の風景に親んできた私にはこの地の折目正しい温和な景色に戸迷って居りますが何んとかしたいと意欲にもえています。

全道展関西地区出張所の心算でこの方面の連絡その他何んでも引受けますから御利用下さい。

皆さんの御健康をお祈り致します。

大森 亮三



この世に40何年を生きてきて、私自身の空しさ浅ましき悲しき疎ましき、そんな暗さを身にしてみても感ぜずにはいられない。本来人間はそのようなものだと思えない。非力な己に鞭打って、侘しい水底から遠く蒼い天空を望んで生きつづけている自分自身を、時に美化しあるいは醜化していくことで、生きている証をたてたいというのが、今の私の版画的な主題である。ただ私の甘い感傷が私の制作の障害となっていることを常に悩みの種としている。強くありたい。ありのままの自分を力強く肯定したい。

藤井 正

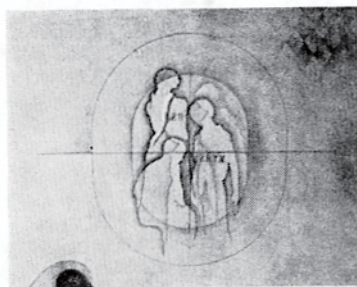
- 絵はわたしの日記です。或る日、或る時のわたしの足どり。
- 絵はわたしのもう1人?の恋人。然し1日で振ってしまうこともある。1枚のキャンバスに2、3人の且つての恋人がぬりこめられていることもあるスリラー物語り。
- 絵を見て思うこと。自分の思考がその絵の中にあるんだろうか。自分の思考のない絵は物真似に過ぎない。自戒のことばです。
- 今、「風太郎」のような人間をかいています。何もしないでグデンとしている人間——あんまり忙しい毎日なので——こんな人間をかいてみたい気がして。



<驚きと感動>

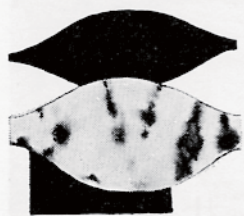
峯田 敏郎

人を驚かす事は簡単なことです。しかし人の心を根底からゆさぶる事は、そう簡単な事ではありません。そう簡単ではない事のために、私達には長い下積みが必要です。インスタントの世の中で芸術までもがインスタントになってしまっただけにはいけないのです。インスタントには、とかくアイデアが先行しますがそれではすぐにいやになります。芸術と言うものが、もし人の力で人を感動させなければならぬ義務を有しているとしたら、並たいていの事で、出来るものではありません。静かに、地道にその力をたくわえなければいけないでしょう。人を驚かすためではなく、人の心をゆさぶるために。



清水 敦

「荒唐無稽」という言葉に僕は今ひかれています。日頃あまりに、意味とか思想とか、なんかかかんとかの重々しい理屈に苦しめられている反動かもしれない。コウトウムケイの行為があつてよい。コウトウムケイの芸術があつてよい、と。そう思うと楽しくなってしまう。たしかにモーツァルトのよさは荒唐無稽のよさかもしれない。



浅山 咲知

今年こそ展覧会が終わらないうち制作にかかろうと意欲をもやし張切る。
……そして会は終わった。……だが少しのんびりとやろうか。……生活のかかった仕事。それに会合。酒も呑む。テレビも見る。そんな事に追れ平々凡々と暮す。……月日は流れる。俺は絵を描なければ。……

指折り数えて大作の準備。だがさっぱり描けない。……小品でトレーニング。……まだ会期迄日があるから大丈夫描る。……週休毎に描う。……纏まらない。ニラメッコで終るのも度々。友人に逢う。「どおだ描てるかい。」「未だやってない。」「じゃ俺も未だいいや。だが気は焦る。纏めよう。週休の中間に休みを入れる。会の日取も決る。休憩の回数も早くなる。もう夜中も描かなければ。……かくして作品ができる。……ああこれは駄目だ。……今年こそ……後はノーマスと同じ>



<画室でのひとり言>

「私を制作にかり立てる意志の源泉は、生への意志と呼応する。」
いささか歯の浮く様なコトバではあるが、これが俺の本音である。

よりよきものに憧れる己れの生命は、時に歌い、時にためらう。ドロドロの悪業にも似た性への燃焼。酒神への讃歌。そしてこの不可思議なる生きもの、^{いのち}人間への愛憎。
その世界で、今日を生きぬく。そして明日も俺の生命は消えぬだろう。

山口 惣市

何?君には眠っていると見えるって?これは参った。
しかし、僕の細々とした瞳にも、透徹した生命のリズムが映像されていることを、君だけは、わかってくれている。



長野 襄

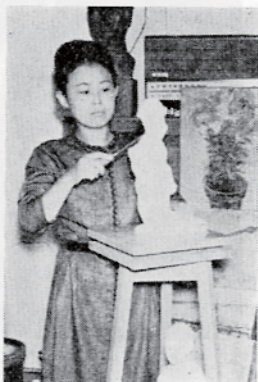
<青空アトリエ>

私のアトリエは青空の下にあります。家の前にある井戸小屋の壁に釘を打ってキャンパスを掛けますと、絵具を飛ばそうが、布片をちらかそうが気にならず、時々岩内山の残雪に流るる雲に眼を休ませては描きつつけるのです。時に子供が通って、私の思いもかけないような寸評をさしはさんで呉れるのも楽しみです。

また青空アトリエのシーズンが来ました。

郷 みつる

胃の治療を始めてからもう3年になるでしょうか。もう私の体質的なものだそう、神経の細い私が粘土をこね廻して、のんびりやるのも精神修養と心得れば、案外胃の治療の一端を担っているかもしれない。こんな理くつをつけて粘土との付き合いも絶ち切れそうにもありません。病院の半日を要する待ち時間も、人々の顔を、動きを眺め、たくましく造形思考?を、こらすことで楽しめますし、主治医そして友人たちの励ましもあって一時の焦躁期も何とかのりきれたようです。これからの長い道程を、ゆっくりとマイペースで歩いて行こうと思います。



押川 清



不恰好な茶碗にすこし溶けにくい葉を掛け一か掬か 思いきって 火をがんがんとく 案外おもしろい物である あまい薬だと失敗は少ないが かわいい薬だと失敗する率は多い だがその失敗を乗り越えて進むところに スリルを感じる さんざん骨を折って やっと溶かした葉の味わいは さすがどっくりと深みがあり 不様な茶碗が 不様なりに生きてくる 人間何でも 苦勞すれば それだけの報いはある……

後世に残るほどの名腕がせめて一腕なりできないものかと見果てぬ夢を追って 今日カマに火が入る